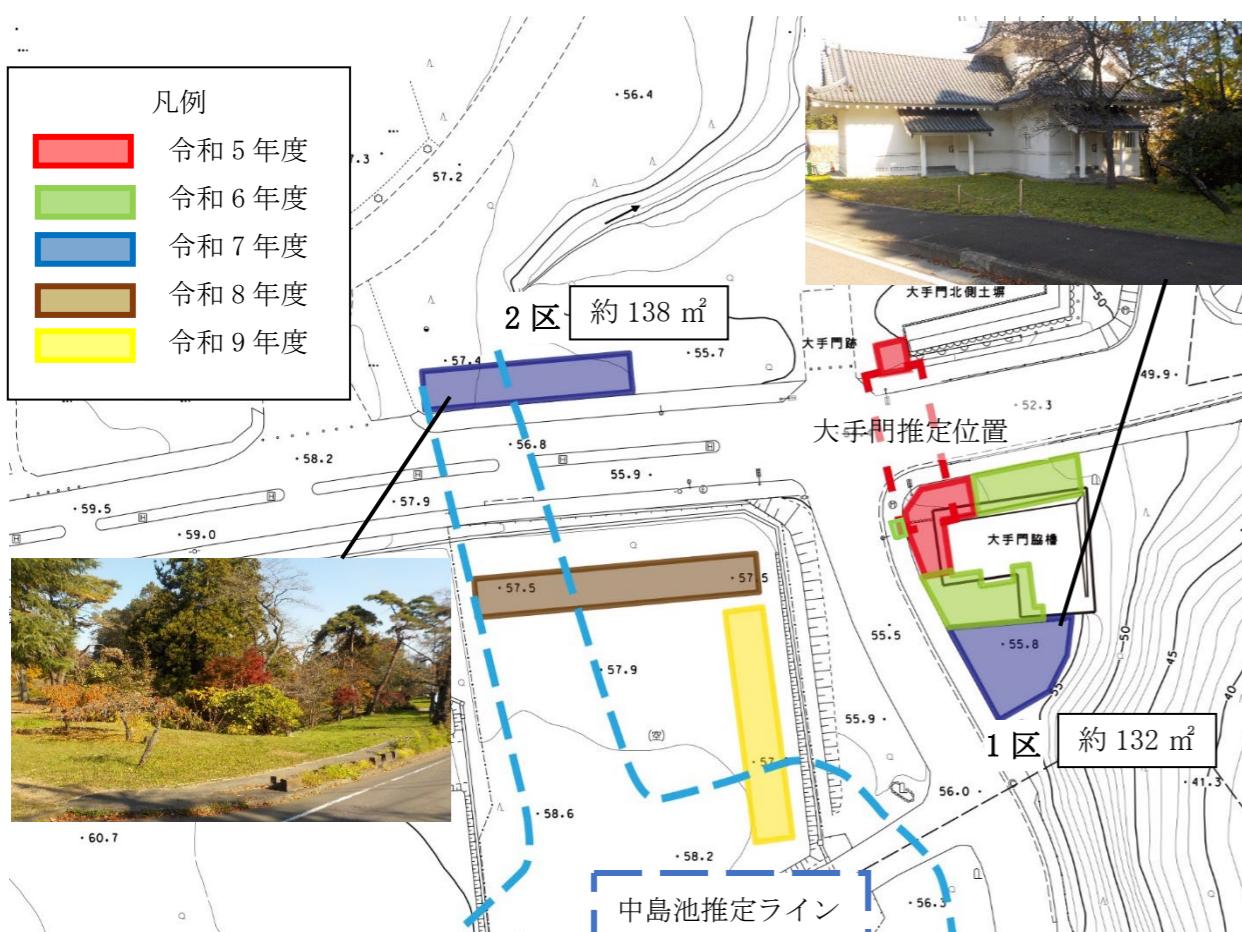


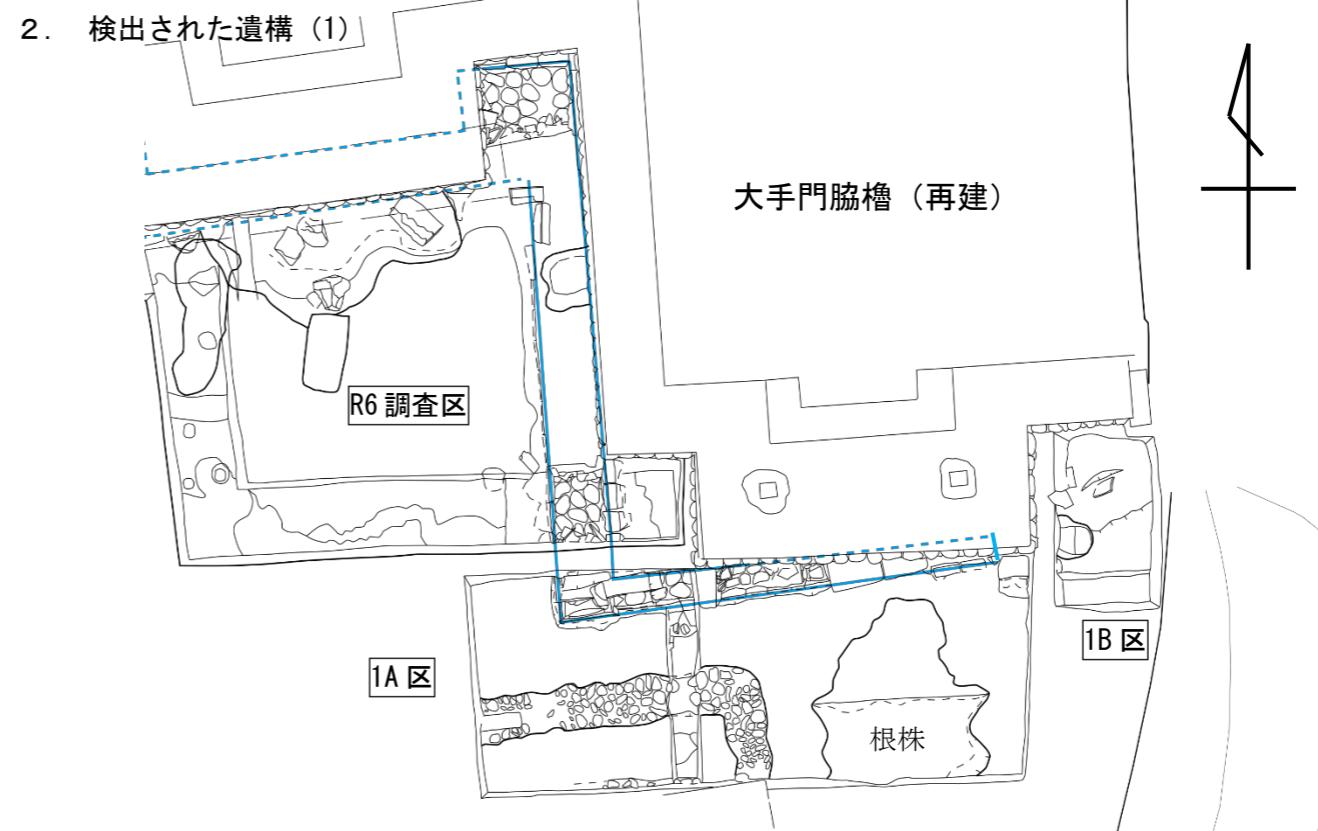
大手門跡および周辺発掘調査（第3次）の状況

1. 調査の概要

目的	『史跡仙台城跡整備基本計画』（以下、「整備基本計画」）の事業計画として実施する。大手門および周辺発掘調査は、令和5・6年度の成果を踏まえて、大手門周辺の遺構の残存状況を確認するため継続して遺構確認調査を実施する。
予定期間	令和7年6月30日～令和8年3月31日
対象面積 ・ 調査内容	合計：342 m ² 大手門および周辺発掘調査（1区：132 m ² 、2区：138 m ² ） 1区：大手門脇櫓（再建）の南側に位置する。令和6年度検出された石組側溝の延長を確認し、併せて大手門・大手門脇櫓周辺の関連施設の有無と残存状況を確認する。また、大手門脇櫓石垣の調査も行い、石垣の修復履歴を確認する。 2区：大手門跡の西側に位置する。中島池から延びる水路の推定ライン上に位置し、大手門周辺の関連施設の残存状況を確認する。



第1図 調査地点位置図



第2図 1区調査区配置図 (S=1/100)



第3図 1A区遺構検出状況（西から）

○石組側溝

- ・R5, R6 年度調査で検出の石組側溝の延長部分を確認。
- ・南北から東西の屈曲部分を確認。やや鋭角に屈曲。
- ・堆積土からは赤色化した瓦や焼土を確認。
- ・屈曲部の南面に土管の口を検出。それを塞ぐための粘土が設置されている。
- ・南西角より東側は、側溝の石組が1段となる。
- ・南辺の東端は崖の上段近くで閉鎖されている。

○「満州事変戦没軍馬之碑」

- ・昭和8年に建立された石碑。現在は長沼の北側に移設されている
- ・縁石部分と石碑基壇部分の基礎とみられる。



第4図 1B区遺構検出状況（北から）

○杭跡

- ・柵跡とその抜き取りの痕跡を確認。
- ・大手門焼失以前に五色沼西側の崖際に沿って設置されていた柵木跡と考えられる。

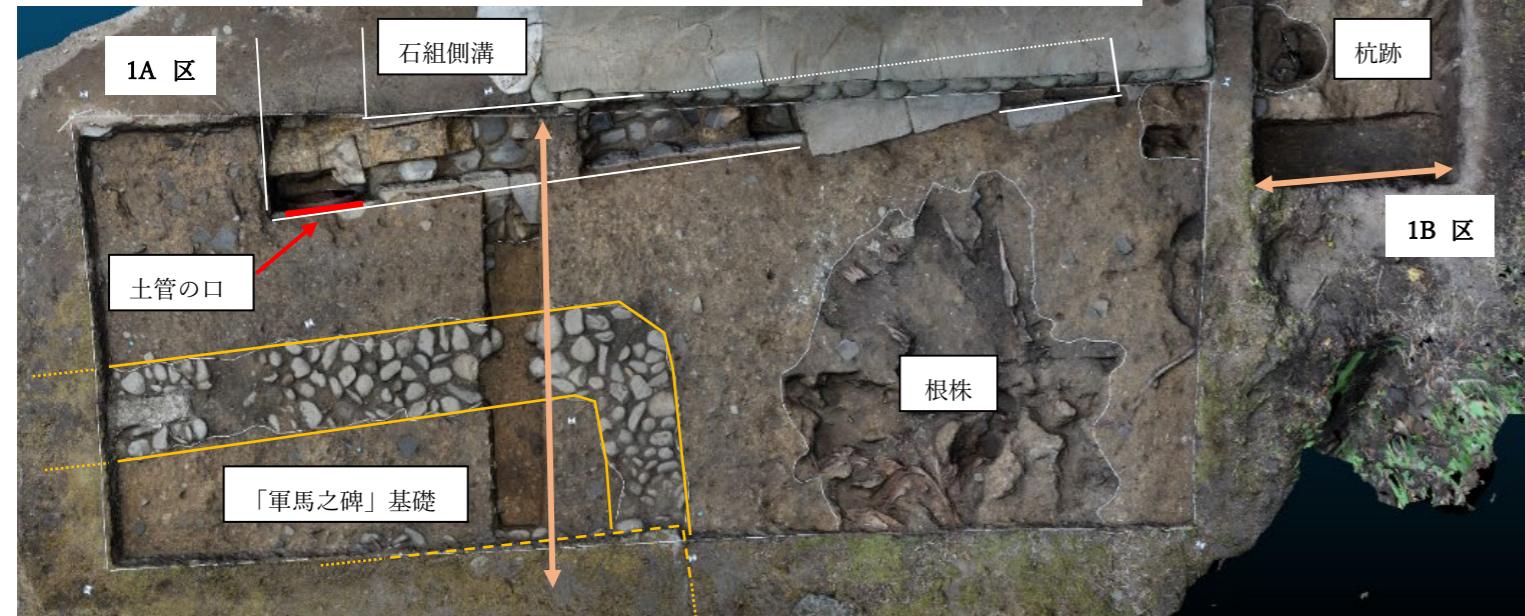
○焼土の広がり

- ・脇櫓（再建）の犬走の下に入り込むような焼土の広がりを確認。

○整地層

- ・東側崖面にかけて複数の土層からなる整地を確認。

2. 基本層序・検出された遺構（2）



第5図 1区遺構検出状況（上が北方向）(S=約1/50)



第6図 大手門脇櫓背面（仙台市博物館蔵）（南西から撮影）

写真右石碑：「満州事変戦没軍馬之碑」（昭和8年設立）



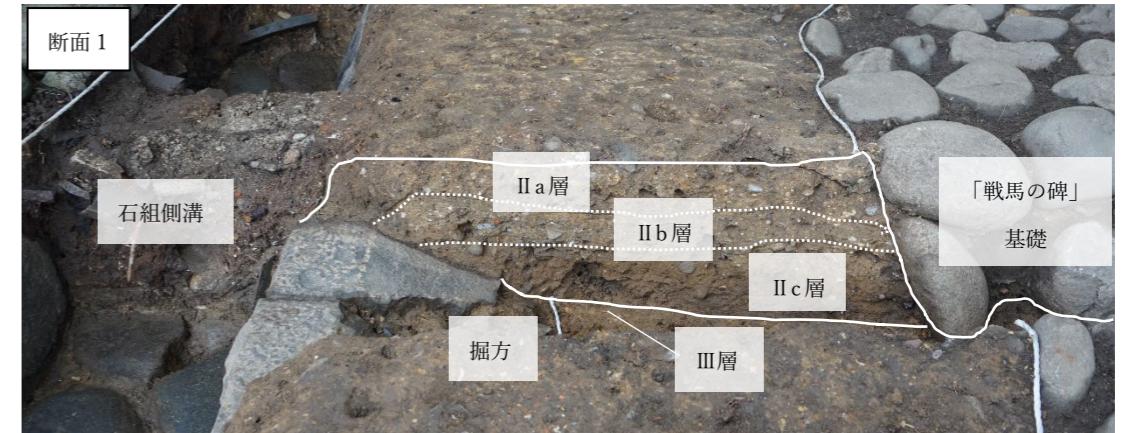
第7図 移設された「満州事変戦没軍馬之碑」

「満州事変戦没軍馬之碑」（第6, 7図）

- 昭和8年に建立された石碑。現在は長沼の北側に移設されている。
- 周辺部分の基礎の玉石地形を確認。
- 縁石部分と石碑基壇部分が検出されたものと考えられる。

<基本層序>

1A, 1B区を通した分層を行った。I層は現代の表土であり、II層は明治23年の大手門修繕工事と一体の整地層、III層以下が明治の修繕を遡る整地層であると考えられる。



第8図 1A区断面（西から）

<1A区：基本層序（第8図）>

I層：現表土

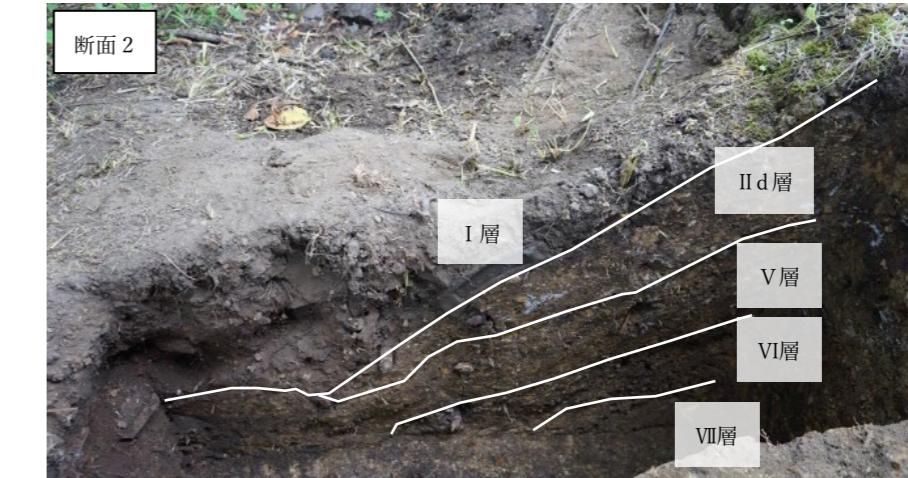
II層：明治の修復時（明治23年）の整地層

IIa～IIc層：石組側溝と一体の整地

IId層：IIa層の下で確認。1A区北東端から1B区にかけて分布する石組側溝と一体の整地

III層：明治の修復以前の整地層 石組側溝の掘方検出面

IV層：サブトレの一部で確認される、明治の修復以前の整地層



第9図 1B区断面（北から）

<1B区：基本層序（第9図）>

I層：現表土

II層：明治の修復時の整地層

IIa：石組側溝と一体の整地 西壁の一部で確認

IId：明治の修復時の整地層 表土の直下に広がり、面的に確認される。

V層：明治の修復以前の整地層

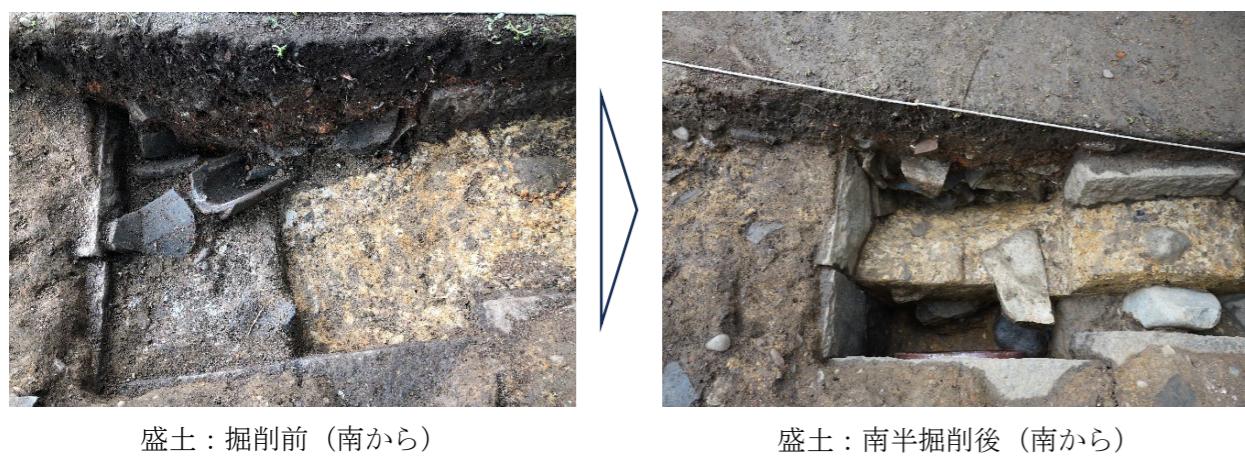
VI層：明治の修復以前の整地層

VII層：明治の修復以前の整地層

3. 石組側溝の構造



第10図 R7調査区 1区（上が北方向）(S=約1/50)

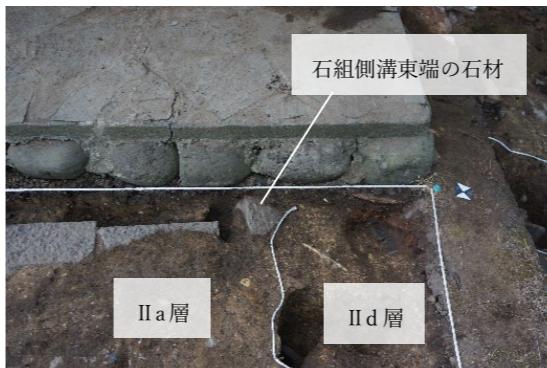


盛土：掘削前（南から）



石組側溝と土管の口（北から）

第13図 石組側溝屈曲部：盛土と土管の検出状況



第11図 1A区北東部の整地層（南から）



第12図 1B区の整地層（北東から）

○陶製土管と石組側溝（第13図）

- ・石組側溝南面に土管の広端側の口を検出。
- ・土管の上と両脇の石材は、土管の円形に沿って石材が加工されており、他の側溝石材と同時の設置と考えられる。
- ・土管については、口の下側の方が上側よりも外に出ているため、側溝から南側へ水を排出するための口であると考えられる。
- ・II層（明治23年の修復時以降の整地）を掘り込んだ痕跡がないこと。「満州事変戦没軍馬之碑」（昭和8年建立）周縁の基礎を解体した痕跡がないことから、土管についても石組側溝と同時の明治の修復時の設置であると考えられる。

○土管の口を塞ぐ盛土（第13図）

- ・土管の口の周辺（石組側溝屈曲部）で均質な黄褐色粘土が、側溝の上面近くまで盛られている。内部に円礫を入れて粘土を盛っており、土管を塞ぐための盛土と考えられる。
- ・この盛土の北側は南北側溝に向かって傾斜している。
- ・焼土や焼けた瓦を含む堆積は、この盛土の上で確認され、この盛土内部や下からは焼土は確認されない。
- ・明治23年の側溝設置以降、昭和20年の焼失前までの盛土であると考えられる。

○石組側溝の東端（第11～12図）

- ・1A区の北東端で石組側溝東端の石材を確認した。この石材はIId層に覆われており、抜き取りの痕跡も確認されていない。これよりIId層も側溝と同時に整地（明治の修復時）であると考えられる。
- ・1B区では表土下にIId層が面的に広がっており、側溝の端で開口している状況は確認されない。
- ・石組側溝の東側は崖面に向けて開口しておらず、排水については土管へ向けていることが窺える。

○側溝の幅と底面

- ・側溝が南北方向から南辺東西方向に屈曲する際に、深さと幅が変わっている。
 - 南北：2段組み・幅広（約80cm）
 - 東西：1段組み・幅狭（約45cm）
- ・東西側溝底面の敷石の上面のレベルを比較すると西側にやや下がっているため、東側の崖側ではなく、土管の方向へ排水していると考えられる。

○石橋状の石材（第14図）

- ・南辺石組側溝の東側出入口前には石橋状の石材が2石設置されている。焼失前の脇櫓の入口の位置を反映するものと考えられる。
- ・石橋東側は石組側溝とズレが見られ、明治23年の修復後に何らかの理由でズラされたと推測される。



第14図 石橋状の石材（北から）

4. まとめ

○石組側溝の構造と変遷（第15図）

<構造>

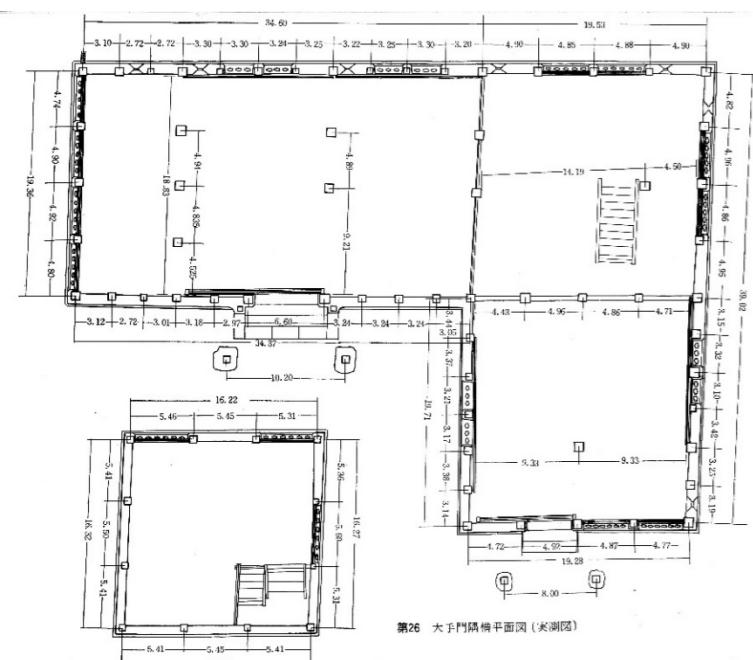
- ・石組側溝は上下2段を基本とし、底面には扁平な円礫を敷設している。脇櫓南東部分では1段となる。
- ・東側の流末は崖ではなく、脇櫓南側の土管を通して側溝外に排水している。
- ・石組側溝は雨落ち溝を兼ねて大手門周辺の排水機能を担っていたと考えられる。

<変遷>

- ・明治23年の修復時に石組側溝が設置される。
- ・後年、石組側溝の外へ水を排出する土管は、礫と粘土を用いて塞がれる。
- ・土管による排水を廃絶した時期は不明であるが、昭和8年に土管の設置されている位置に「満州事変戦没軍馬之碑」が設置されるに伴い、石碑の基礎が土管に干渉する恐れがあったために粘土で塞がれた可能性が考えられる。
- ・明治23年修復以前の脇櫓の側溝（雨落ち溝）は検出されなかった。

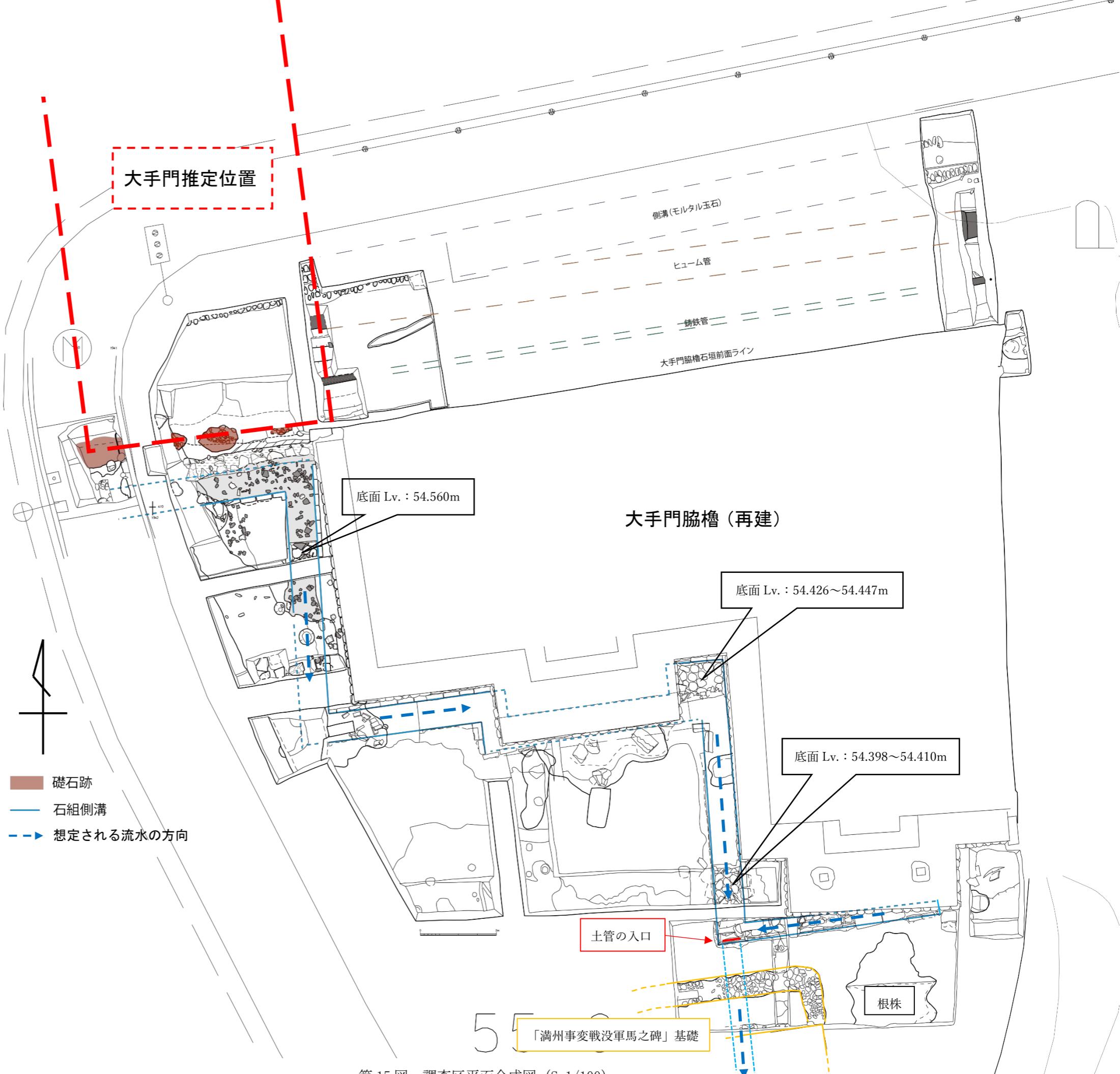
○焼失前の大手門脇櫓と大手門脇櫓（再建）の位置関係

- ・石組側溝が令和5年度～令和7年度までを合わせて広範囲で輪郭を確認することができた。
- ・屈曲する部分については、直角に近い箇所とやや鋭角になる箇所が見られ、焼失前の脇櫓の建物の形や、大手門と接する角度を反映していると考えられる（第16図）。
- ・焼失前の建物の配置については、石垣の現況の平面図とあわせて更に検討する必要がある。



第16図 大手門脇櫓実測図 (S=約 1/200)

(仙台市教育委員会 1967) (昭和5年小倉強氏による実測図を再掲した図面)



第15図 調査区平面合成図 (S=1/100)